

# 英語の blue における抽象的意味〈悲観的な〉の創発をめぐる一考察 —歴史と文化と身体性から読み解く青と悲観の関係性—

新谷 真由

## Abstract

The English color term *blue* often means “depressed” or “depressing.” The fact that the word for the color blue stands for these mental experiences, is probably only seen in English whereas French, from which the word *blue* was taken, had never had this phenomenon. The question arises for what reason the word *blue* has acquired these novel meanings. The goal of this article is to elucidate how these meanings of *blue* have emerged and developed in English with the European cultural and historical background. We will aim to reveal the connections between the color blue and the mental experiences associated with it.

Key words: Color words, Polysemy, Embodiment, Metaphorical Projection, Cultural and Historical Context.

## 1. はじめに

本研究の目的は英語の blue の抽象的意味の派生過程を明らかにすることである。英語の blue は色彩（より厳密には色相）を表すことばであり、このような語は一般的に色彩語（color term）と呼ばれる。色彩は明度、彩度、色相<sup>1</sup>の三つの点から捉えることができるが、blue は複数ある色相の特定の範囲、すなわち青い色相を表すことばである。したがって、blue ということばが英語の中において用いられるとき、ある物体が〈色相として青い〉<sup>2</sup>状態にあることを意味する。

ある物体が〈色相として青い〉と人間が感じるのは、色知覚という神経学的なプロセスが介入しているからである。色知覚とは、物体の表面に可視光線（白色光）が当たり、特定の範囲の電磁波が反射され、それが人間の視覚器官から取り込まれて神経系に到達することによってもたらされる知覚経験のことである。日常生活において物を見る時、色の知覚経験が光の反射によってもたらされていると意識している人は多くないであろうが、物体に色を見るという経験は光学的な経験に他なら

ない（今井・中野：14-18）。このような視点から blue ということばを改めて捉えなおすと、〈色相として青い〉ということばの意味は、現実世界における人間と物体との相互作用によってもたらされる認知的な経験に裏付けられていると考えられる。(1) は、〈色相として青い〉という意味で blue が用いられている例である。

- (1) a. She lay on the grass,... and looked up at the *blue sky*.  
 (SCOTT Mary, *Nudists May Be Encountered*, 1991)<sup>3</sup>  
 b. On the *blue cloth* spread over the low table stood an empty vase.  
 (KOREN Yeshayahu, *Funeral at Noon*, 1996)

しかしながら、(2) の文に見られる blue は、光学的・神経学的な経験を意味しておらず、したがって〈色相として青い〉を表してはいない。

- (2) a. Monday has often been called a *blue day*.  
 b. We scoured the data for evidence that Monday was *bluer* than Tuesday or Wednesday.  
 (*New York Times*, October 12, 2012)  
 c. Now she is happy, now she is *blue*, and so, alternately, is the audience.  
 (*Time: The Treatment*, January 8, 1966)

(2) の blue はそれぞれ抽象的な心理状態である〈悲観的な〉という意味で用いられている。したがって、blue には具体的な色相を表す意味と、抽象的な心理状態を表す意味の、二つの別々の意味があるため、多義語の様相を呈していることがわかる。

次に、多義性について考えたい。多義語の複数の意味はお互いに連続性（多くの場合、派生関係）があり、ネットワーク構造を成し、全体としてひとつのまとまりのように機能していることが、認知言語学の分野では多くの研究者により報告されている（Langacker 1991, Lakoff 1987：91-114, Tuggy 2003, 瀬戸 2007：31, 松本 2010：24, 初山 2001, 初山・深田 2003：135-136）。この考え方に従うとすれば、blue のそれぞれの意味の間には何がしかの連続性および関連性があることになる。Cruse (2011：324) は、多義語の複数の意味に見られる連続性は派生関係に基づくものであり、より具体的な意味からより抽象的な意味へと派生されることを述べている。この多義の派生関係についての見解が妥当であると判断した上で、blue の複数の意味である〈色相として青い〉と〈悲観的な〉の派生関係を捉えてみると図1のようになる。図中の実線の四角形は語の個別の意味を表し、破線の四角形は概

念領域を示す。それぞれの破線四角形を結ぶ矢印は派生関係を示すとともに、矢印の先端はその方向性を表す。

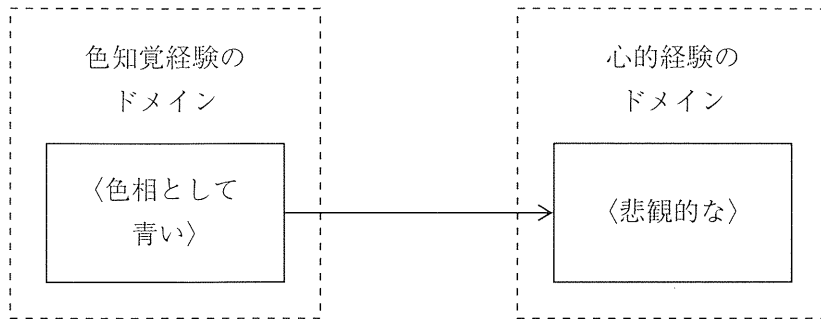


図 1. Blue の複数の意味間における派生の方向性

派生とその方向性を示したうえで、次に問題となるのは派生過程の中身であろう。Lakoff 流の概念メタファー理論をやや乱暴に用いてふたつの意味の派生関係を表すとすれば、[DEPRESSION IS BLUE] (「悲観的なことは青いことである」) であろうか。色知覚ドメインの経験が心的ドメインの経験を構造化するため、blue がある種の心理状態を表すようになったと考えてみよう。すると、blue に〈悲観的な〉という意味が見出されるのは、概念間の何がしかの投射関係や指示のずれ等の比喩的操作に基づく抽象的経験の構造化が関わっていると考えられるであろう。しかしながら、この概念メタファーは、そこまで多くのことを説明できるわけではない。つまり、〈悲観的な〉ことが〈色相として青い〉ことでもって理解されることへの不思議へ、十分な回答を提供できていない。また、この不思議への回答は辞書に記載されているわけでもない。Oxford English Dictionary (以下 OED) をはじめとする英語大辞典では、blue の項目内に「恐怖、心配、憂鬱、悲観、などの心理状態に陥ることである」との説明がある<sup>4</sup>。しかしながら、これだけでは、blue の抽象的意味の内容はわかったとしても、なぜ blue なのかに関しては答えがない。〈色相として青い〉と〈悲観的な〉という意味はどちらも /blu:/ という音声表示形式で繋がっているものの、その実、同音異義語と見なされても仕方ないほどに意味は乖離してしまっている。青の色知覚経験が伴わないにもかかわらず、blue が心理状態を表すのはなぜであろうか。また、青の色知覚と英語の話者の心理活動にはどのような繋がりが根底にあるのであろうか。両者の意味がもしひとつのことばに属するならば、色知覚経験と心的経験の連続性が必ず何らかの形であることになる。本研究では、この連続性が一体何に基づくものなのかを十分に精査する。

次に、本論文での議論の方向性を示す。青と悲観性が結びつくのは、(筆者の知る限りでは) 英語という言語体系においてのみである。日本語、または blue の直

接の借入元であるフランス語においては、伝統的には連続性は見られない。したがって、本研究では派生の原因を言語の置かれる文化や社会から求めていくことも重要であると考ええる。なぜなら、言語を包囲する文化や社会的文脈も、言語の発展に一定の影響を与えているからである。人間の言語活動とは、周囲のあらゆる「環境」<sup>5</sup>を取り込みながらそれを内面化および概念化し、言語という表象に還元するという断続的な活動に他ならない。また、認識主体（と認識主体が属する共同体）は「環境」を取り込みながらもこれ自体に修正を加え、後世に引き継いでいく活動を行うため、「環境」も言語と同じく断続的に変わっていく有機物である。本論文では、英語の話者がどのような「環境」を取り込みながら、blueに〈悲観的な〉という意味を創発させてきたのかを考察する。

最後に、研究の手順を述べる。本論文は大まかにふたつの区分から成る。本論文の前半では、英語のblueということばの歴史的発展を追うとともに、ヨーロッパ文化における青色の象徴性と扱いの歴史が、どのように英語のblueの抽象的意味を創発させたのかを探る。後半では、英語のthe bluesという表現に着目し、どのようにこのことばが〈悲観的な状態〉という意味を獲得したのかを明らかにする。

## 2. 英語が借入した語 blue に見るヨーロッパにおける青

本セクションでは、英語のblueに付随する〈色相として青い〉と〈悲観的な〉という意味が、どのように創発され、展開してきたのかをヨーロッパの文化と歴史に照らし合わせることでより明らかにしていく。セクション2.1では、blueのフランス語からの借入の過程の詳細と英語への借入後の意味展開を見る。セクション2.2では古代・中世ヨーロッパでの色彩体系の順序およびその中での青色の位置付けを考察することにより、青色にどのような価値や象徴性が持たされていたのかを明らかにする。また、フランス語で〈悲観的な〉を意味する色彩語を併せて提示することにより、英語との共通点および相違点を導き出す。セクション2.3では、to burn blueという表現を例にとりながら、blueが悲観を表すことについて身体性と文化の相互作用という観点から説明を与える。

### 2.1 英語のblueの借入過程とその意味

現代英語（Present-day English=PdEと略）において青い色相はblueということばで表しているが、古期英語（Old English=OEと略）（890-1100年頃）にはまだこのことばは存在しなかった。青い色相が古期英語の話者に認識されていなかったということではなく、色相そのものを表現することばがなかったのである。青い

色相の範囲は grène (>PdE *green*) が受け持っていたようである(須賀川 1999: 27)<sup>6</sup>。

Blue という語は中英語期 (Middle English=ME と略) (1100-1450 年頃) になつてようやく古フランス語 (Old French=OF と略) の bleu<sup>7</sup> (> 現代フランス語 *bleu* (e)) から借入され、ME では blew, blwe, bleu, blou(e) のように綴られた。現存する文献中でこの語が最初に確認できるのは英語頭韻詞 *Pearl* である。423 行目の “Art þou þe quene of heuenez blwe (Are you the queen of blue heaven?)” というくだりである。文中に見られる þe quene of heuenez blwe とは聖母マリアのことである。借入元の OF では、1100 年頃の bleu は「打撲傷の皮膚の色」と「曇りのない空の色」を表していたとされており<sup>8</sup>、英語においても heuenez と blwe が修飾関係にあることから、借入の際に〈空の色〉という意味も共に借入れられてきたものと考えられる。

さて、現存する文献でこの語が抽象的な意味、すなわち〈悲観的な〉という意味で初めて使用されているのは、Chausser による詩の *The complaint of Mars* (1385) 中である。Blue という語が英語に登場してからさほど遠くない頃合いに既に登場しているという点は興味深い。以下に、該当箇所を抜粋する。

(3) *Wyth teres blewe, and with a wounded herte*

Taketh your leve...

(悲しい涙を流し、傷ついた心のまま、すぐにここから立ち去りなさい)

(*The Complaint of Mars*, 8-9)

現代人の我々は青色と涙に自然な繋がりを見出すことができるが、中世ヨーロッパ社会では水の色は青と捉えられてはおらず、その役目は緑か白<sup>9</sup>が負っていたのである。したがって、(3) の blewe は〈色相として青い〉を意味するのではなく、抽象的意味を表すと考えてよい。前後の文脈を考慮すると、既に〈悲観的な〉という意味で用いられることがあったことが分かる。

本セクションで明らかになったのは、英語においては借入のかなり早い過程で、blue が色相と心理的意味の両方を表していたということである。しかしながら、ここでもう一度注意しておきたいのは、フランス語は伝統的に bleu ということばに〈悲観的な〉という意味がないことである。このことから、ME は OF から blue と共に〈空の色〉という意味を引き継いだ一方で、英語は借入のかなり早い段階でその体系内に〈悲観的な〉という意味を独自に創発させたということである。次のセクションでは、上記の事実に着目し、中世およびそれ以前のヨーロッパでの青色の扱いを探ることにより、英語にどのような影響が与えられたのかを明らかにする。

## 2.2 古代・中世ヨーロッパの色彩体系の発展からみた青と悲観との関連性

アリストテレス以降、古代から中世のヨーロッパでは、白と黒（これらは現代では色彩と見なされていない）が、全ての色の基本であると考えられていた。この枠組みでは、白と黒は赤をはさみながら色彩軸上の両端を占めており、黄、緑、紫は「中間色」として白、赤、黒の三色の間に位置すると考えられていた。したがって、色彩軸上の順序としては、白、黄、赤、紫、緑、黒となっていた（Mollard-Desfour 2013: XXIV-XXV, Pastoureau 2000: 81-83, 徳井 2006: 32-33）。この体系において、白、黄、赤は「光の色」として、そして紫、緑、黒は「暗黒の色」として、それぞれ扱われた（徳井 2006: 34）。この色彩体系内において青は不在である。なぜなら、古代ギリシャはもとよりその流れを汲む古代ローマにおいて青は軽視されており、この無関心は中世まで続くことになった。ギリシャ・ローマ人にとって、青は蛮族（であるゲルマン人およびケルト人の用いたタイセイや彼らの瞳）の色であり、衣服として纏われることが避けられた。いかにローマ人が青に価値を置かなかったかは、blue/bleu の語源を考えてみれば分かる。Blue の借入元である（古）フランス語はラテン語派に属するものの、blue/bleu 自体はラテン語由来ではなく、ゲルマン語派に属する古低地フランク語の \*blao<sup>10</sup> に由来している。他言派からの借入に頼るほど、ギリシャ・ローマ社会は青に特別な価値を求めなかったのである<sup>11</sup>。

さて、先ほどの古代からの色彩体系に議論を戻す。この枠組みでは紫と緑と黒は同系統に属する色で、「暗黒の色」と一括りにされていた。中世のキリスト教世界では、異教徒である古代ローマのこの色彩認識の仕方が持ち越されており、絵画の中や聖像としての聖母マリアは喪や嘆きを表すためにこれらの色を纏った<sup>12</sup>。しかしながら、11 世紀以降に、青は緑と黒の間に位置するものと考え始められるようになる<sup>13</sup>、聖母マリアの嘆きを表す衣服の色として徐々に使用されるようになった（Mollard-Desfour 2013: XV, XXXV）。青は紫や緑や黒と同種の色と一括りにされるようになり、喪や悲観の色として認識されるに至った。

やや早計かもしれないが、伝統的な側面から考慮すると、英語体系内において青色を表す blue が〈悲観的な〉という意味を持ちうるのは、聖母マリアの悲観や嘆きを象徴的に表す色であったためと考えられる。英語に blue が借入された 1300 年代には、借入元のフランスでは聖母マリアの喪の色が完全に青へと移行を遂げていた時代でもある。したがって、青と悲観は連続性を成しうるに、十分な土台が築かれていたことが考えられる。(3) で提示した Chaucer の *teres blewe* (= 悲しい涙) の組み合わせには、ME における青の背景知識が反映されているのではないであろうか。聖母をある種のドメインと捉えた場合に、その属性である青と悲観の概念間には隣接関係があるため、青でもって悲観があらわされるようになったと考えられる。

しかしながら、ここでやはり注意しておきたいのは、ヨーロッパを土壌に据える全ての言語がヨーロッパ文化に裏付けられた色彩の象徴性を均一的に受け入れているわけでもないことである。フランスにて青は聖母マリアによって率先して纏われたものの、フランス語の青である bleu には〈悲観的な〉という意味は今も昔もない。フランス語においては、今も昔も伝統的に〈悲観的な〉という意味は noir (= 黒色) が請け負っている<sup>14</sup>。参考までに、(4) に noir が〈悲観的な〉という意味で使用されている例を提示しておく。

- |  |   |
|--|---|
| (4) a. des idées <i>noires</i><br>some ideas black<br>(悲観的な考え)                 | f. de <i>noirs</i> soucis<br>of black worries<br>(気がかり)                   |
| b. un drama <i>noir</i><br>a drama black<br>(悲劇)                               | g. de <i>noirs</i> pressentiments<br>of black premonition<br>(悲劇的な予感)     |
| c. un chapitre <i>noir</i> de ma vie<br>a chapter black of my life<br>(悲観的な期間) | h. un <i>noir</i> destin<br>a black destiny<br>(悲観的な運命)                   |
| d. être d'humeur <i>noire</i><br>to-be of-temper black<br>(憂鬱症である)             | i. voir tout en <i>noir</i><br>to-see everything in black<br>(世の中を悲観的に見る) |
| e. un avenir <i>noir</i><br>a future black<br>(悲観的な将来)                         |   |

フランス語において noir が〈悲観的な〉という意味を持ち合わせるのは、このことばのプロトタイプの意味が〈暗い〉という「空間的な光の欠如」を表すことに基づくことと、四体液説、異教徒的視点の名残等、様々な歴史的事情がある。本論文ではこれに関する深い議論は差し控えることにして、Shintani (2010) および新谷 (2011: 162-200) を参照されることをお願いしたい。

本セクションを締めくくるにあたって、古代・中世ヨーロッパにおける色彩体系の視点から議論をまとめ直す。英語において〈悲観的な〉を意味する色彩語は blue であるものの、その直接の借入元であるフランス語では noir がその意味を表す。中世において、それまで喪の色の代表格であった緑と紫と黒の中に青を新たに滑り込ませたという色彩の認識方法は、英語の blue の意味形成にも影響を与えた。〈色相として青い〉を意味する blue が、〈悲観的な〉という意味を持つに至ったのは、ヨー

ロッパという文脈の中において、単なる偶然の産物ではなかった。仮に、悲観を意味する色彩語の選択が完全に恣意的であったとしたら、赤でも黄でも良いわけである。〈悲観的な〉という意味の色彩語が英語においては blue であり、フランス語においては noir であるのは、伝統的なヨーロッパの色彩体系認識を考慮すると大変自然な成り行きである。日本や中国を含む東アジアが、喪の色を白に象徴させていたことと対照させて考えるとよいであろう。

### 2.3 身体性と文化の交差点から見つめる青と悲観の関連性

前セクションでは、古代・中世ヨーロッパの色彩体系内の位置づけの発展が、英語の blue に〈悲観的な〉という意味をもたらす一因となったことを見てきた。本セクションでは、身体的な青さと悲観的な心的状態が比喩を介して連続していることを説明するとともに、その連続性が文化により支えられていることを提示したい。本セクションでは、認知意味論の観点から議論に取り組む。具体的には、セクション 2.3.1 では、蠟燭の事例を通じて英語の blue が喪や死を始めとする不吉な概念とつながりやすいことを提示する。セクション 2.3.2 では、身体的な異常の状態と心理的な異常の状態の連続性を提示することにより、〈悲観的な〉ことが〈色相として青い〉ことによって理解される過程を明らかにする。

#### 2.3.1 不吉な色としての青—蠟燭の炎と人間の生命活動に見られる写像関係

OED では blue の項目内には、死をはじめとする、人間にとって不吉な現象を表す用例がいくつか提示されている。本論文では、その中でも to burn blue という表現に着目し、蠟燭の青い炎が死を現前化させている事例をとりあげる。例文 (5) を参照されたい。

- (5) a. *to burn blue*  
 b. The Lights *burne blew*. It is now dead midnight.  
 (SHAKESPEARE William, *Richard III* Act5, Scene3, 1594)  
 c. A minister gets up in a crowded lecture-room, where the mephitic air almost makes *the candles burn blue*, and bewails the deadness of the church.  
 (STOWE Harriet Beecher, *American Woman's Home*, 1869)  
 d. The good old couple were amaz'd...For both were frighten'd to the heart, and just began to cry, "What art!" Then softly turn'd aside, to view whether *the lights were burning blue*.  
 (SWIFT Jonathan, "Baucis and Philemon," 1706)



(5) の例で用いられている to burn blue という表現は、シネクドキ表現であり、蠟燭の燃える様子のことが「青く燃える」というより一般的な表現で表されている(「燃えるもの」の一種としての「蠟燭」のことである)。(5b-d) の例文から伺えることは、少なくとも英語圏(5c はアメリカ英語である)においては、蠟燭の炎が青色に燃えると死や靈魂に関する事柄をイメージさせるというスキーマがあるということである。本セクションでは、様々な文献<sup>15</sup>を参照することにより、この両者の結びつきの謎に迫る。

両者が繋がる背景には、身体性と文化に関する複雑な理解の連鎖がある。キリスト教圏としてのヨーロッパにおける、蠟燭の炎の解釈の一例をここで提示したい。ヨーロッパにおいては、一般的に、人間の魂は蠟燭の炎になぞらえられることが多く、蠟燭は人間の外部に顕れ出た魂であると捉えられているようである。例えば、グリム兄弟が編纂した童話の *Godfather Death* (死に神の名付け親) の中にも、蠟燭の炎が人の命を表象する箇所が見られる。主人公が代父である死に神に、今にも消えそうな蠟燭の炎をもう一度燃やしてくれるように懇願する場面があるが、この物語を支えるのは、蠟燭の炎と人間の命の間に対応関係があるという理解である。また、ヨーロッパでは次のような風習が伝統的には見られたようである。Gettings (1988: 54) によると、カトリック教会では破門宣告の儀式が行われる際、聖書を閉ざし、蠟燭を地面に投げることで炎を土で消し、亡くなった者に対して行うように教会の鐘が鳴らされる。この時、聖書はいわゆる「命の書」を、蠟燭の炎は失われる魂を、そして鐘は臨終の時を表すとされている。以上のように、伝統的にキリスト教圏に属すヨーロッパでは(おそらくカトリックでなくとも)、蠟燭の炎が人間の命を表すものと見なされており、ヨーロッパ人の思考を支えるメタファー的写像関係が成り立っている。

蠟燭の炎が人間の魂に喩えられるには、いくつかの理由が考えられるが、そのひとつとして、両者の間に構造的な類似性が(主観的に)見出されることがあげられる。宇宙(太陽や星)の光が普遍的/不変的である一方、蠟燭の光は個別的/瞬間的である。キリスト教の神は普遍的/不変的である一方、人間の生命は個別的/瞬間的である。そして、個々の蠟燭の炎と人間の生命との間には特徴に類似性があり、普遍的/不変的な存在と比べた場合、どちらも容易に「消える」儚さを内に秘めている。また、蠟燭と人間の生命には別の特徴的類似性がある。すなわち、炎は燃えるために他物を糧(燃料)とする必要があるが、人間の生命もそのような糧(食料等)が必要である。以上のような含意が写像関係として蠟燭と人間の間にあるために、伝統的に人間が蠟燭のように理解され、実際に言語に表層化されてきたのである。(6) にあげる例を参照されたい。

- (6) a. ...you must watch your health and try not *to burn the candle at both ends*.  
(*Best*, 1991)
- b. Stop *burning the candle at both ends* or you'll have more murky mornings.  
(*The Belfast Telegraph*)
- c. Here *burns* my *candle out*.  
(SHAKESPEARE William, *Henry VI*, Act 2, scene 6, 1589-91)
- d. *Out, out, brief candle!*  
(SHAKESPEARE William, *Macbeth*, Act 5, scene 5, 1606)

以上検討した、蠟燭の炎と人間の生命の間に見られる投射関係を図2に示す。認識主体は三つの異なる領域（「宇宙の光」「蠟燭の炎」「人間の生命」）の間で比較をし、主観的な類似性を見出した結果 [HUMAN SOUL IS A CANDLE FLAME]（「人間の魂は蠟燭の炎である」）という概念メタファーを作り出していると考えられる。

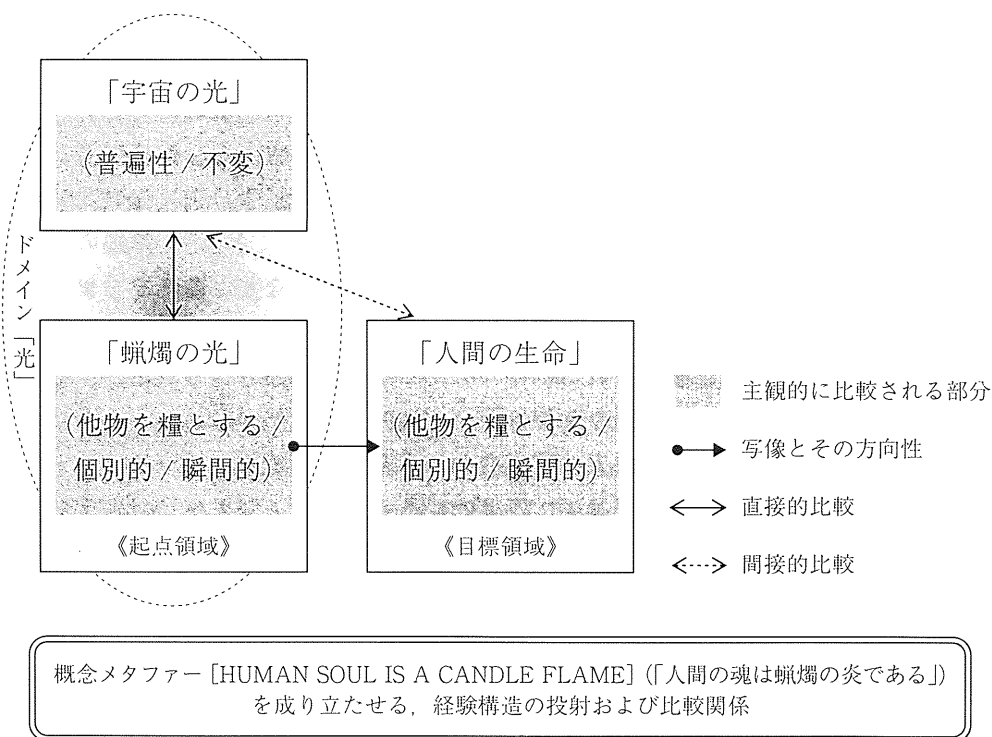


図2. 三つの異なる領域間における含意の投射関係およびそれに基づく概念メタファー

両者の間には客観的な類似性というものには存在しないことに注意されたい。なぜならば、蠟燭の光が糧とするものは人間が糧とするものとも異なり、蠟燭の個性性と人間の個性性も物理的には異なり、また、宇宙の光の長さと比べても蠟燭の瞬間性と人間の寿命の瞬間性は大きく異なるからである。蠟燭と人間というふたつの事物は、物理的レベルでは全く異なる存在同士である。しかしながら、認識主体は宇宙的な光の持続性や規模と比べることによって、蠟燭の光と人間の生命の間に構造的類似性を主観的に生じさせており、またそのように理解しようとしていることが考えられる<sup>16</sup>。

本セクションでは蠟燭と人間の間には写像関係が見出されていることがわかったが、ここで再び to burn blue という表現に立ち戻ろう。青く燃えるとなぜ死の予兆を意味するのか。次のセクションではこの問いに答えを見出したい。

### 2.3.2 身体と青と死

前セクションでは、認識主体が蠟燭の炎と人間の生命に構造的な類似性を導き出していることを見てきた。本セクションでは身体的な側面から、蠟燭の炎が青く燃えることと死の関連性について明らかにしたい。

キリスト教圏においては、蠟燭の炎は人間の外に現れ出た魂である。青い炎が人の死の予兆や靈魂の存在を示唆するという背景には、蠟燭の青い炎と人間の身体的青さの間でメタファー的投射関係があることに原因を發する。すなわち、蠟燭の火に関する経験構造と人間の身体的・生理的経験構造の間で、主観的な比較が行われているのが原因である。例えば、蠟燭の経験的構造と人間の身体的・生理的経験構造とは以下のようなものである。蠟燭の炎は、本来は中心部を除き赤く燃える。赤色ではなく青色に燃えるという現象は、蠟燭の燃え方においては異常な事態といえる。一方、人間に関して言えば、健康な人間の身体には血が淀みなく通っており、皮膚を通じて血色良く活力があるように見えるものが、人間の皮膚が血の色を失い(くすんだ)青色に見える場合は、人間の健康にとって異常な状態にあることを即座に意味する。したがって、蠟燭と人間の両者にとって、正常な状態は赤であり、異常な状態は青であるという特徴が見いだせる<sup>17</sup>。上記で考察したように、ヨーロッパ文化圏において蠟燭の炎は人間の外部の魂であると考えられるので、赤い炎と血の気の関連付けが与えられる一方で、必然的に青い炎と血の気のなさにも関連付けが与えられることになる。人間の身体にとって血の気が無い状態とは、病気や怪我等の活力の衰える事態であり、またこれを通じて死と直接的または間接的に関する状態に陥る可能性があることである。

以上の蠟燭の考察を通じることにより、現段階で暫定的に言えることは、青という色は、人間の生命維持活動にとって好ましくない状態の色であり、究極的には死

に付随する色と見なされうることである。PdEにおいて、身体的に青い状態が、人間の健康について異常な状態を示唆する表現を次の(7)に提示する。

- (7) a. *Blue in the face* and entangled by his own cord, a baby boy emerged after nine hours of agonizing labour, during which Ann was assisted by Aunt Bridget.  
(GIDLEY Charles, *Armada*, 1988)
- b. Doug emerges from the cabin *looking blue* with cold.  
(MILDMAY Eroica, *Lucker and Tiffany Peel out*, 1993)
- c. Do not put the bandage on too tight or you may find your fingers or toes *going blue* through lack of circulation.  
(MITCHELL David, *Winning Karate Competition*, 1991)
- d. The baby boy *went blue* after his lungs became blocked.  
(*Central News Autocue Data*)
- e. He was not breathing. He was *dark blue*. A person *goes blue* if deprived of oxygen.  
(*World Affairs Material*)
- f. They called an ambulance when Clare became unconscious and her lips *turned blue*...  
(BANKS Iain, *Complicity*, 1993)
- g. My knees were *blue* with bruises.  
(HOWARD Geoffrey, *Wheelbarrow across the Sahara*, 1990)

(7) では、身体から血の気の引いた状態や皮膚の打撲傷が blue によって表されている。(7) は物理的な反応である。しかしながら、精神的に恐怖や絶望感または失望感を感じる時、しばしばそれが身体の皮膚上に現れ出ることもある。それは、身体的に青くなること、すなわち「青ざめる」ことであり、英語においては to turn blue with fear という表現にもなっているとおりである。(8) の例文を参照されたい。

- (8) The girl's eyes were wide with fear. Her face *was turning blue*.  
(DARVILL-EVANS, *Deceit*, 1993)

(8) の例では、恐れ (fear) と身体連続性が伺える。精神的な恐れが身体に反応を起こしているのであり、原因と結果の関係性を含んでいる。以上の考察より

blue と悲観の間に導き出される関連性は、次の通りである。英語において blue が〈悲観的な〉という意味を持つ一因として考えられるのは、身体によりなされる一連の経験の構造が、心理的ドメインに投射されるためである。身体に現れ出る青は、人間の生命維持活動においてはネガティブな反応に他ならないことを人間は経験によって理解している。身体が青く変化することは人間にとってマイナスの価値があるため、心理的にネガティブな状態である悲観的な状態も、blue でもって理解されるに至った可能性があると考えられる。この経験的な理解は、[PSYCHOLOGICAL NETAGIVE STATE IS BLUE] (「心理的にネガティブな状態は青である」) という概念メタファーを生じさせる素地となっている。以下の両ドメインに存在する含意間の投射関係を表したものである。

### [PSYCHOLOGICAL NETAGIVE STATE IS BLUE]

(概念メタファー「心理的にネガティブな状態は青である」)

起点領域 (身体的経験)		目標領域 (心理的経験)
身体的状態	→	心的状態
身体への物理的ダメージ	→	精神への抽象的ダメージ
活力	→	気力
身体的に良好な状態	→	精神的に良好な状態

以上の投射関係が成り立つのは、(8) で見たように、身体と心は地続きであるところによる。そのため、英語ではこのような概念メタファーが可能になるのである。ここで日本語の例を考えて見たい。怪我や疾病または死の際に身体の表面に生じる青い反応自体は生理学的現象なので、日本語においてもこのような身体的ダメージを表すために「青」ということばが用いられる。

- (9) a. 二度と開くことのない青ざめた唇に、この世でさいごの水を飲ませた。  
(大下英治『修羅の群れ』1984, 14 頁)
- b. その人はとても青い顔をしていて、血が一—実際は流れていなかったそうなんですけれど—流れているように見えて、まるで死んでいるように見えたんです。  
(ゆうきみすず『きらめく星空に哀愁のチャルメラが聞こえる』1988, 34 頁)
- c. 青い顔をした患者たち、消毒薬の匂い、器具のふれあう音、白衣の医師、看護婦たち…  
(宮尾登美子『蔵』1993, 74 頁)

- d. その瘦せ衰え、青ざめた顔こそ、幽霊そのもののようでした。  
(江戸川乱歩『化人幻戯』1994, 288 頁)
- e. 病人らしく顔が青く病みやつれていらっしゃるのが、かえって蒼白に透き通るように見えるお肌つきなど、世にまたとないほど痛々しく可憐で…  
(瀬戸内寂聴『源氏物語第六巻』2002, 223 頁)

日本語には身体的な青さの表現は(9)の例のとおり存在するものの、身体的反応に基づく青さの経験構造がメタファーを介して心理的なドメインに投射されることはない。すなわち、日本語の「青」ということばは、伝統的には悲観を表すような意味拡張はとげていないということである。「彼は今、青い」は He is blue とは異なり、心的な経験を意味しない<sup>18</sup>。

メタファーは認知的方略であり、選択的な手段である。経験構造が普遍的な身体性に基づくものであっても、それが他領域をメタファー的投射により構造化するかどうかは、それぞれの文化や社会的な背景も関わっている。英語において [PSYCHOLOGICAL NEGATIVE STATE IS BLUE] が創発されるのは、ヨーロッパにおける青色の文化的な認識の仕方、すなわち喪や死や聖母の色などの背景知識がその根底にあり、また原動力となり得ているからであろう。

### 3. The blues の正体がもたらす悲観

しばしば名詞形の blue は the blues のように、限定詞と複数の屈折接尾辞を伴わせる形で用いられる。The blues は「悲観的な心理状態」を意味し、(10) に示すように、PdE では to have a fit of the blues や to have/get the blues のような表現において良く用いられる。

- (10) a. ...all new mothers *had a fit of the blues* after giving birth...  
(STREET Pamela, *Guilty Parties*, 1990)
- b. ...she's *got the blues*...  
(Hot Press, 1991)
- c. “A *fit of the blues*,” she said with some diffidence.” It happens every now and again...  
(NEIL Joanna, *The Waters of Eden*, 1993)
- d. I guess you're wondering why *the blues have got* you.

(GAY Anne, *The Brooch of Azure Midnight*, 1993)

e. Whenever I get *the blues*, I look at this...

(ANDERSON Caroline, *The Spice of Life*, 1993)

The blues が常に定冠詞に伴われる形で現れるには、実はわけがある。The blues とは元々は blue devils という表現のことであり、特定の存在（または概念）を表すものであったためである。現在では、元々の blue devils という表現はすっかり廃れており、(10) の例文に示されるように専ら省略された形でしか用いられない。本セクションではなぜ the blues および blue devils が「悲観的な心理状態」を表すことになったのかを明らかにした。

さて、OED の説明によると、「悲観的な心理状態」の意味で blue devils<sup>19</sup> が初めて文献上に現れるのは、1781 年の Francis Burney の日記（7 月 2 日付け）である。(11) に Francis Burney の例をはじめとする、18 世紀後半から 19 世紀で用いられた blue devils の例をあげる。

(11) a. Thinking..that generous wine will destroy even *the blue devils*.

(BURNES Francis, *Diary* 2 July, 1781)

b. Do *the blue devils* your repose annoy?

(RHODES William B., *Bombastes Furioso*, 1800)

c. We have something of *the blue devils* at times.

(JEFFERSON Thomas, *The Writings of Thomas Jefferson*, 1810)

d. Soon after he was troubled with *blue devils*, and was very sad after reading the newspapers.

(FONBLANQUE Albany, *England Under Seven Administrations*, 1837)

e. Lady Jane, in the novel, less languish'd to hear if that elegant cornet she met at Lord Neville's was actually dying with love or— *blue devils*.

(MOORE Thomas, *The Poetical Works of Thomas Moore, including Melodies, Ballads, etc.*, 1835)

f. Violent bodily exercise, riding, or climbing up steep and rugged pathways are my best remedies for *the blue devils*.

(KEMBLE Frances Anne, *Atlantic Monthly: November* 1876)

g. He got discontented and had *fits of blue devils*.

(*Weekly Dispatch* 8 February, 1880)

COHA (*Corpus of Historical American English*) にて確認できる限りでは、blue

devils は 1916 年の “My blue devils live deep down in my soul.”<sup>20</sup> での出番を最後に見られなくなったようである。おそらく PdE の話者は、the blues を blues devils ではなく、音楽の一形態 (the blues/ a blues/ blues) との関連づけのもとで「悲観的な心理状態」と理解しているかもしれない。しかしながら、音楽の blues も blue devils にその命名の起源を持つ。The blues が「悲観的な心理状態」を意味するように、blues もそのような心理的状态を歌として表現したものであるからだ。

では、devils と悲観はどのように結びついているのであろうか。Blue devils は、元を辿れば抽象的な心理状態を表すものではなく、字義通りの意味、すなわち「青い色をした悪魔」を意味するものであった。この字義通りの意味での使用が現存する文献上で初めて確認できるのは 1616 年である。(12) に 17 世紀および 19 世紀での blue devil(s) の例を提示する。

- (12) a. Alston, whose life hath been accounted evil, And therefore calde by many *the blew devil*.  
(*The Times' Whistle*, 1616)
- b. David's harp chased away *blue devils* from Saul, and Louisa's harp has conjured *blue ruin* from Sir Samuel.  
(Albert SMITH & George CRUIKSHANK, *Bentley's Miscellany*, 1840)
- c. ...have you sold yourself body and soul to *the blue devils*?  
(KIRKE James, *Madmen All*, 1847)
- d. Whatever may be the analogical meaning of the term, certain it is that *the blue devils* are accounted ill spirits, and very disagreeable things. To some they come only occasionally, to others they form a permanent source of misery...  
(COOK Eliza, *Eliza Cook's Journal: Volume 6*, 1852)

(12) の例文が示すように、(the) blue devil(s)<sup>21</sup> は、字義通りの使用のもとでは「人に不幸をもたらすような存在そのもの」、「害悪を与える悪魔」、および「悪霊」という意味である。(11) と (12) の示すように、blue devils は 17 世紀から 19 世紀にかけては、字義的な「人を不幸にする悪魔や悪霊」と心的な「悲観的な心理状態」の両方の意味で理解されていたようである。その一方で、(13) に提示する 1870 年の文献のように、blue devil(s) の意味が字義的とも心的とも区別のつかない曖昧性を帯びたものも存在する。



- (13) The sentimentalist is the spiritual hypochondriac...He loves to think he suffers, and keeps a pet sorrow, a *blue-devil* familiar, that goes with him everywhere, like Paracelsus's black dog.

(LOWELL James R., *Among my Books*, 1870)

(13) の例文では、blue devil は sentimentalist (感傷的な人) にとって親友のようなものであり、また、アグリッパ (Agrippa) の従えていたような black dog<sup>22</sup> のようであるとも捉えられている。この説明から、blue devil は、a pet sorrow であるので実在的な形を持った何がしかのものと捉えられているようであり、また同時に、人に「悲観的な心理状態」をもたらす元凶のように捉えられていたことも伺える。

では、devil、要するに悪魔はなぜ人に「悲観的な心理状態」をもたらすと捉えられていたのか。この繋がりに関しては、イギリスのルネサンス期の Robert Burton の著作である *The Anatomy of Melancholy* (1875 [1621]) を参考にしながら原因を考えたい。ヨーロッパではルネサンス以前、精神的な病をはじめとする悪い行いや思考は、全て悪魔の仕業によるものと考えられていた。しかしながらルネサンス以後、そのようなものは全て自分自身の心に原因があるという (現代的な) 考え方に移行した<sup>23</sup>。キリスト教影響下のヨーロッパでは、疾患としての「悲観的な心理状態」をもたらす憂鬱症は、鈍重、無気力あるいは非生産的な状態をもたらすものと考えられており<sup>24</sup>、伝統的には「七つの大罪 (Seven deadly sins)」のうちのひとつに当てはまる「怠惰 (ラテン語 *acedia*)」と結び付けられていた。またこの「怠惰」は、ベルフェゴル (Belphegor) という悪魔が人の体内に憑くことによって引き起こされる罪と考えられていた<sup>25</sup>。Burton (1875 [1621]: 186-190; 231-232) によると、鬱病は狂気や精神錯乱とも混同視されており、この病をもたらす「悲観的な心理状態」は、しばしばひと括りに暴力的なものであるとも考えられてきた。Burton も憂鬱症の症状は (現代的な定義づけから考えるとかなり) 多岐におよぶものと見なしており、その中には悪魔の憑依が原因のものも含まれることをあげている。したがって、現代的な科学観からはかなりずれているが、ヨーロッパでは当時、憂鬱症やそれをもたらす「悲観的な心理状態」は悪魔憑きの結果であるとみなされることもあった。

Gettings (1988: 18) は、悪魔像にはその時代の気風や先入観が反映されていると述べている。18 世紀に唯物論がはじまってからは、悪魔は倒錯した想像の産物であると思なされるようになっていったが、blue devils という表現が出回った 17 世紀から 19 世紀にかけて、悪魔を信じる人はどのくらいいたであろうか。とはいっても、キリスト教の根強い影響を考えると、「悲観的な心理状態」が悪魔によ

る仕業と考えていた人も少なからず残っていたことも否めないであろう。『イメージ・シンボル事典』<sup>26</sup>によれば、心理学の分野において、悪魔とは、人間のまだ表に現れ出ていない暗い危険な面のことである。To have the blues/ to have blue devils とは文字通り、「悪魔を身体/こころのうちに宿している」状態のことに違いないであろう。「悲観的な心理状態」を blue devils によって表すのは、概念的（時代を越えた一部の人には空間的）隣接関係に基づくメトニミー表現であるといえるであろう。現代人が I have the blues today と発言した場合、「今日は心の中に悪魔がいる」と真に思いながら発言する人は（おそらく多くは）いないかもしれないが、ことばとしての the blues は過去の英語が持っていた象徴性や解釈を同時に含み続けている。おそらく、悪魔がより想像上の産物となっていくに従い、devils がとれてゆき、the blues という一見しただけでは出所不明な表現が専ら流通することになったものと思われる。

さて、悪魔はなぜ blue でなければならないか。その動機づけはヨーロッパの青の扱い方に見ることができるであろう。セクション 2.2 でも見てきたように、古代からの伝統において、ヨーロッパの主役の色は白、赤、黒の三色であり、その他の色は白か黒と同一視されていた。このような文化の中で青は非日常的な色であり、無関心か、蔑みや喪の色として扱われてきた。Pastoureau (2000: 38-39) は、スイスは Zillis にある聖マルティン教会の 12 世紀頃に制作された天井画の悪魔の色<sup>27</sup>が、押しなべて青に塗られていることを指摘している。パストゥロー (Ibid.) はこれについて、青い色は 12 世紀頃まで普段用いられる色でなかったため、人々の不安を煽る色であったとの見解を示している。また、Teddeo di Bartolo の *Last Judgement* (1394 年作) では地獄の悪魔が青色で描かれており、人々に襲いかかっているが、これは死後の世界での出来事を表している。やはり青と死は、いずれも生を営む人間には非日常的なものであり、結びつきやすい関係にあったことがわかる。Blue devils は人の心を苦しめる存在であったのであろう。現代的な用法の the blues は英語（元はヨーロッパ）文化を、文字通り色濃く残す表現なのである。

#### 4. おわりに

英語の blue に〈悲観的な〉という意味が創発される過程には、様々な文化・社会的要因や身体的要因が背後で交錯していることが本研究で明らかになった。

本研究の前半では、文化・社会的要因に関する事項として、色彩体系内の個々の色彩の位置づけの要因や宗教的価値づけの要因が、青い色に〈悲観的な〉象徴性を与えてきたことを見た。また、身体に関する事項として、身体的経験の諸相が、隣

接関係に基づく指示のずれを介することにより心的経験を構造化することが青色に〈悲観的な〉意味を創発させていることも見た。このような構造化が見られるのは英語においてのみであり、身体経験が普遍的ではあるものの、全ての言語が同じ投射を行うわけではなく、その背後には文化による動機づけが関わることについても言及した。

本論文の後半部分では、the blues という表現の発展の仕方を追うことにより、この表現の意味である〈悲観的な状態〉がどのように英語の中で展開されてきたのかを見た。この表現は、文化的に不在であるがゆえに人々の不安を駆りたてる青色と、人間の心に憑依し悲観的な思考をもたらし（と考えられた）悪魔との、概念的な結合によって成り立っていたことを見た。The blues という表現は、時代を越えながらもその成立の歴史を背後に忍ばせる「文化的」な表現であり、ヨーロッパという土壌が生み出した表現であることが分かった。

英語の blue は単なる色彩語にとどまらない。それを使う者には無意識のうちに、歴史と文化を伝え続けさせようとする、生きたことばなのである。

- 
- 1 色相とは、白色光がスペクトラムを通る時に得られる、ある電磁波の範囲ことである。
  - 2 本論文ではことばのスキーマ的意味を〈 〉内に表示している。
  - 3 本論文では、例文を場合に依じて本論文末に提示した「使用コーパス」および「辞書・辞典」から引用している。引用先のない例文および表現は筆者によるものである。
  - 4 OED の blue (形容詞) には次のように記載されている：① “Affected with fear, discomfort, anxiety, etc.; dismayed, perturbed, discomfited; depressed, miserable, low-spirited,” ② “Of affairs, circumstances, prospects: dismal, unpromising, depressing.”
  - 5 この場合の「環境」とは、広義の「環境」であり、身体が活動する生物学的な環境はもとより、文化・社会的な構築物のことも含む。
  - 6 Grène の表す色領域と geolu (>PdE yellow) の表す色領域の区別も曖昧であったようであり、OE においては青、緑、黄の意味文化は明確には確立されていなかった（須賀川 2009: 27）。
  - 7 Bloe, blo, blef, blève などの異形もあった。
  - 8 Mollard-Desfour (2003: XXVIII) を参照のこと。
  - 9 古代から中世ヨーロッパの社会では水は緑色と捉えられていたため、当時の地図は海や湖などの部分が緑色に塗られていた (Pastoureau 2013: XX)。その一方で、紋章において、水のしずくを模した文様は全て白く塗られていた (徳井 2006: 38 - 41)。いずれの場合を考慮しても、水と青色は結びついていかなかったことが分かる。
  - 10 古高地ドイツ語から再建された語であるので・を付けた。
  - 11 青の色がギリシャ・ローマ人に見えていなかったわけではない。あくまで軽視していたのである (Pastoureau 2000: 27-30)。

<sup>12</sup> 例えば、1335年のイタリアの例になるが、Ambrogio Lorenzetti 作のイコンである *Maestà* では聖母は深緑の衣装を着ている。フランスでは12世紀には既に聖母マリアの衣装に青がほぼ定着していたが、イタリアではその傾向は薄いようであった。伊藤（2002:103-122）によると、イタリアでは赤の支配が強いため、青の流行が抑えられたことが原因であると述べられている。イタリアでは14世紀になっても、青以外の色が聖母に用いられていたことが *Maestà* の絵から伺える。

<sup>13</sup> 青の登場の理由に関しては明確な答えはないが、Pastoureaux（2000:80-83）は染料技術の向上が、くすんだ青をはっきりとした濃い色にしたためであるとの見解を示している。

<sup>14</sup> 現代のフランス語では avoir le blues (=to have the blues) という表現が良く見られるが、これは英語からの翻訳である。この表現の借入の過程と用いられ方の詳細については新谷（2011:251-256）を参照されたい。

<sup>15</sup> 本セクションでは参考資料として『世界シンボル大事典』『イメージ・シンボル事典』『世界シンボル辞典』『図説：世界シンボル事典』『シンボル事典』『英語イメージ辞典』を参照することにより、blueの象徴性の背後に横たわる西洋の文化的特性を考察した。

<sup>16</sup> ありとあらゆる文化共同体がこのような視点を持ち得るわけではない。人間の生命と火、または人間の生命と蠟燭の炎の間に構造的な投射を行うのは、ヨーロッパの文化という、特定の環境に埋め込まれた人間としての身体構造を持つ主観の集合体であることに注意したい。

<sup>17</sup> BleuはOFの最初期では身体に浮かび上がる打ち身の色を表していたという説がある。詳しくは *Le Robert Dictionnaire historique de la langue française* の bleu の項、および新谷（2011:230-231）を参照されたい。

<sup>18</sup> 「彼は今、青い」は「未熟な」という意味にでもなるであろう。日本語の「青い」は別のメタファーを生むようである。ただし、日本語にも英語からの借入語として「今日は一日中ブルーだった」というような表現はある。日本語に借入された「ブルー」の用法および「青い」の比喩的意味の詳細については新谷（2011:257-260）を参照されたい。

<sup>19</sup> フランスには blue devils が存在しないということをフランス人がフランス語まじりの英語で話している箇所が1800年代の文献にある。Google books: *American English* より該当箇所を引用する。“Vous autres Anglois, vous êtes si tristes—so sad you English gentlemen. – always ces maudits blue devils! We have no blue devils in France, but when you English gentlemen bring them from the ... Ces coquins de douaniers should put a duty comme ça,” spreading out her hands, “on the blue devils Inglis.” (*The Monthly traveler, or, Spirit of the periodical press, Volume 1*, p.161)

<sup>20</sup> 1916年、E. G. O'Neill 作、*Now I Ask You* という戯曲中に見られるのが最後である。

<sup>21</sup> 字義通りに青色の悪魔を表す場合は、複数形に限らず blue devil のように単数形で表されることもあったようである。また、Valpy（1818:284）によると、blue devils は人間が横たわり眠りにつく際、目をつぶった状態のまぶたに交互に現れ、眠りを阻害するものであったという記述がある。このために複数形で綴られた可能性もあるが、不特定複数の悪魔が人を苦しめたためとも考えられる。

<sup>22</sup> Davies（2009:48）によると、アグリッパが黒い犬の姿をした悪魔の連れ合いを従えていたことは、当時一般的に広く信じられていたようである。また、『世界シンボル辞典』によると、黒犬は「魔術」「魔神」「呪われたもの」「死」を表すとしている。

- 23 『英語イメージ辞典』の evil の項目を参照のこと。
- 24 岡村・岡田・川島 (2007: 49) を参照のこと。
- 25 『イメージ・シンボル辞典』の demon の項目を参照のこと。
- 26 p.172 を参照のこと。
- 27 Zillis の天井画だけではなく、筆者の調べた限りでは、Giotto の *Last Judgement* (1304 年作)、Jaume Serra の *The Descent into Limbo* (14 世紀後半頃作)、Teddeo di Bartolo の *Last Judgement* (1394 年作) などに青色に塗られた悪魔が登場しているのが確認できる。

## 参考文献

- Biggam, Carol P. (1997) *Blue in Old English: An Interdisciplinary Semantic Study*. London: Runetree Press.
- Burton, Robert (1875 [1621]) *The Anatomy of Melancholy*. New York: W. J. Widdleton Publisher. (岡村真紀子・岡田典之・川島伸博 (訳) 『憂鬱の解剖』京都府立大学学術報告 (人文・社会) 第 59 号 (2007)・第 60 号 (2008)).
- Cruse, Alan (2011) *Meaning in Language: an Introduction to Semantics and Pragmatics*. Oxford: Oxford University Press.
- Davies, Owen (2009) *Grimoires: a History of Magic Books*. Oxford: Oxford University Press.
- 今井弥生・中野刀子 (1986) 『暮らしの色彩学』東京: 建帛社.
- 伊藤亜紀 (2002) 『色彩の回廊: ルネサンス文芸における服飾表象について』東京: ありな書房.
- Lakoff, George (1987) *Women, Fire, and Dangerous Things: What Categories Reveal about the Mind*. Chicago: The University of Chicago Press.
- Langacker, Ronald W. (1991) *Concept, Image, and Symbols: the Cognitive Basis of Grammar*. Berlin: Mouton de Gruyter.
- 松本曜 (2010) 「多義性とカテゴリー構造」澤田治美 (編) 『語・文と文法カテゴリーの意味〈ひつじ意味論講座 1〉』23-43. 東京: ひつじ書房.
- Mollard-Desfour, Annie (2013) *Le Bleu*. Paris: CNRS Éditions.
- 初山洋介 (2001) 「多義語の複数の意味を統括するモデルと比喩」山梨正明 他 編 『認知言語学論考 1』29-58. 東京: ひつじ書房.
- 初山洋介・深田智 (2003) 「多義性」松本曜 (編) 『認知意味論』135-186. 東京: 大修館書店.
- Pastoureau, Michel (2000) *Bleu: Histoire d'une couleur*. Paris: Le Seuil.
- (2013) "Préface," *Le Bleu*. A. Mollard-Desfour (ed.). Paris: CNRS Éditions.
- 瀬戸賢一 (2007) 「メタファーと多義性の記述」楠見孝 (編) 『メタファー研究の最前線』31-61. 東京: ひつじ書房.
- Shintani, Mayu (2010) "Polysemous color terms in French, English and Japanese: conceptualization and general cognitive faculties," *Cahier du CRISCO, Vol. 30*, 18-38. [www.crisco.unicaen.fr].
- 新谷真由 (2011) 『身体と環境は比喩表現の発生にいかにかかわるか—日英仏言語文化論の試み—』筑波大学博士 (言語学) 学位請求論文.
- 須賀川誠三 (1999) 『英語色彩語の意味と比喩: 歴史的研究』東京: 成美堂.
- 徳井淑子 (2006) 『色で読む中世ヨーロッパ』東京: 講談社.

Tuggy, David (2003) "The Orizaba Nawatl verb *kisa*: a case study in polysemy," *Cognitive Linguistic Research* 23, 323-362, H. Cuyckens, R. Dirven & Taylor J.R (eds.). Berlin: Mouton de Gruyter.

Valpy, Abraham J. (1818) *The Pamphleteer* 11. London: A. J. Valpy.

#### 辞書・辞典

ビーダーマン, ハンス (2000) 『図説: 世界シンボル事典』 (藤代幸一 (他訳)) 東京: 八坂書房.

クーパー, J.C. (1992) 『世界シンボル辞典』 (岩崎宗治・鈴木繁夫 (訳)) 東京: 三省堂.

シュヴァリエ, ジャン・ゲールブラン, アラン (1996) 『世界シンボル大事典』 (金光仁三郎 (他訳)) 東京: 大修館書店.

Gettings, Fred (1988) *Dictionary of demons: a guide to demons and demonologists in occult law*. London: Rider.

水之江有一 (編) (1985) 『シンボル事典』 東京: 北星堂書店.

Simpson, John (ed.) (2009) *Oxford English Dictionary*. 2nd Edition, Version 4.0 (CD-ROM).

ド・フリース, アト (1984) 『イメージ・シンボル事典』 (山下主一郎 (他訳)) 東京: 大修館書店.

#### 使用コーパス

Base Textuelle Frantext (<http://www.frantext.fr>).

British National Corpus (Mark Davis) (<http://corpus.byu.edu/bnc/>).

Corpus of Contemporary American English (Mark Davis) (<http://corpus2.byu.edu/coca/>).

Corpus of Historical American English (Mark Davis) (<http://corpus2.byu.edu/coha/>).

『現代日本語書き言葉均衡コーパスモニター公開データ (2009年度版)』 ((独) 国立国語研究所 研究開発部門より提供.)

『現代日本語書き言葉均衡コーパス 中納言 1.1.0』 (独) 国立国語研究所.

(<https://chunagon.ninjal.ac.jp/>)

Google Books: American English (Mark Davis) (<http://googlebooks.byu.edu/>).

Project Gutenberg (<http://www.gutenberg.org/>).

Time Magazine Corpus (Mark Davis) (<http://corpus2.byu.edu/time/>).

University of Oxford Text Archive (<http://ota.ahds.ac.uk/>).